



「証言の中の記憶」(Michael Lynch & David Bogen, 1996, The Spectacle of history より第6章”Memory in Testimony” (pp.178-200))

朴, 沙羅(訳)

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 52:19*-48*

(Issue Date)

2019-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011866>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011866>



(翻訳)

証言の中の記憶

(Michael Lynch & David Bogen, 1996, *The Spectacle of history* より第6章 "Memory in Testimony" (pp.178-200))

朴 沙 羅

「でも、思い出すときに心的プロセスがあることは、君だって否定できないよ——私たちが何かを否定したがつているかのような印象は、なぜ生まれるのだろう? 「そのときやっぱり内的プロセスがある」と言う人は「やっぱり君には、見えてるんだ」とつぶけて言おうとする。しかしやっぱりこの内的プロセスこそ、その人が「思い出す」という言葉で意味しているものなのだ。——私たちが何かを否定したがつているかのような印象が生まれるのは、私たちが「内的プロセス」のイメージに抵抗しているからである。私たちが否定しているのは、内的プロセスのイメージによって、単語「思い出させる」の正しい使い方を教えてもらえる、ということなのだ。つまり私たちが言っているのは、そのイメージとその波及効果に邪魔されて、その単語の使い方が、あるがままに見られていない、ということなのである。——ウイトゲンシュタインⁱ

[イラン・コントラ事件ⁱに関する両院合同審査会により開催された] 公聴会ⁱⁱ

i レーガン政権の国家安全保障会議 (NSC) を率いるロバート・マクファーレン大統領補佐官、後任のジョン・ポインデクスター補佐官、そしてNSC幹部のオリヴァー・ノース元海兵隊中佐らによって引き起こされた政治スキャンダル。彼らは1986年から数度にわたり、当時アメリカと敵対にあったイラン・イスラム共和国にイスラエルの仲介を得て武器を売却し、その利益をニカラグアの左派政権打倒を目指す武力集団「コントラ」に提供した。1986年10月に発覚したが、この作戦がマクファーレン、ノース、ポインデクスターら数名以外には知らされていなかった上、関係者が意図的に書類を破棄したため捜査は難航した。1987年を通じて、タワー上院議員 (共和党) を委員長とする超党派の特別調査委員会 (大統領特別検討委員会 (President's Special Review

を通じて、証言は「思い出され」たり「回想され」たり、あるいは事実を「思い起こした」ものとして組み立てられた。その光景は、逆転した「記憶の劇場」とでも言えよう。かつてフランセス・イエイツは書いた。中世における記憶の劇場では、演説者の眼前に半円の劇場が広がる。居並ぶ彫像のドラマティックな表情とグロテスクな姿形は、登場人物や台詞をたやすく想起させ、筋立てや物語を展開させる²。対照的に、尋問という劇場では、証言者が小道具や台詞の中心に位置づけられる。彫像ではなく、聴衆の目とカメラによって取り囲まれ、あらゆる角度から検討されながら、証言者は（時にグロテスクな）表情と姿形を生み出しつつ「内発的に」想起する。想起するに従って、証言者はその声や顔で記憶の劇を演ずるか、あるいは過去の細部を思い出せないと述べる。この演劇的な設定は、想起の率直かつ正確な特徴を損なうかもしれない。しかしそれでも質問者と証言者とは、証言者の記憶が組み立てられ、調べられるドラマに結び付けられている。この対話によって、聴衆は信頼性や誠実さ、自発性を見聞きし、証言者の人格を評価する。

記憶はしばしば、人々が過去を述べるときに根底となる、認知的プロセスだと思われている。この見方によれば、証言とは証言者の脳のどこかにある情報処理メカニズムの産物である。例えば法学者の多くにとって、証言とは証言者が実際に思い出す事柄の、間接的で定かでない表明である。記憶に対するこの考え方はじゅうぶん自然に見える。しかし証言を精査すれば、情報処理とは全く異なった姿を描きだすこともできる。証言はしばしば証人の想起に焦点を当てる。情報公開は大きな争点である。一方、証人の頭の中で何が起こっているとも、その想起はある出来事を公的な記録に残すか否かをめぐり、産出とコントロールの闘争の中にあると理解するのは、極めて重要だ。公的な記録に

Board. 通称タワー委員会)、議会諜報委員会、両院合同調査委員会、ウォルシュ独立検察官チームなどが、関係者の尋問、公聴会、関係書類の精査などを行って事件の解明を図った。マクファーレン、ポインデクスター、ノースは有罪となったが、後に調査の過程で与えられた証言免責を根拠に無罪とされた。またイランへの武器売却を当初認めた以外、大統領の直接の関与はなかったとの判断がなされ、大統領弾劾には至らなかった。調査の結果を待たず、1987年3月、レーガン大統領は事態を正確に把握していなかったことをふくめ、この事件のすべての責任が自分にあると国民に向けて謝罪し、事態の收拾を図った。

ii 両院合同調査委員会の公聴会は合衆国全土にテレビ中継された。

は、ある事件についての個人の記憶や集合的記憶をも超える事柄が含まれている。つまり、多様な物語や歴史の証拠資料となる、事実に基づくドキュメントや証言が。さらには、個々人が想起する際に情報機関を活用する方法と、そのような情報機関が情報を産出しコントロールする方法も刻み込まれている。以下に引用する不運な証人（この証人は、スコット首席裁判官によるスコット調査の中で証言した。スコット調査とは、英軍商人が湾岸戦争直前にイラクで武器を販売したことに英政府が共謀していたのではないかという容疑——奇妙なほどアメリカのイラン・コントラ事件に似た状況——の調査である）の話から、この点を十分に理解していただけるだろう。「白髪混じりの国防省職員、アラン・バレットは証人席で無情な時を迎えていた。彼は1980年代にイギリス軍の武器がイラクに流出したことについて、サッチャーが関与したか否かについて、思い出したり忘れていたりしていた。イラクの「戦争しに行く go-for-arms」戦略に関するMI6の報告書を見たことがあるかと問われると、バレットは「私はそれを見たはずかどうか考えています。思い出せません」と答えた。さらに問われると、彼はこう付け加えた。「見なかったと言えと言われました」³。バレットが何かを見た「はず」、また「見なかったと言えと言われた」と述べているのは、公判という状況においては、控えめに言っても驚くべきことだ。なぜなら、自身の過去の経験についての証言が、外部組織から情報をコントロールされた結果であると口を滑らせたことになるからだ。しかし、彼がそのようなことをあからさまに口にしたのは奇妙かつ自己破滅的である一方、そのように情報をコントロールする存在は驚くことでもなんでもない⁴。政府の役人が裁判の場で想起するとき、その内容は検閲され、誰かの前でリハーサルされただろうことは想像に難くない。このような情報コントロールは、証言者の頭の中にある情報処理プロセスではなく、国家の諜報を産出し、発信し、隠蔽し、漏洩させる組織的かつ具体的な方法に由来している。証言者が過去を思い出す方法が、実際に、そして認識の上でいかなる論点を持ち得るか緻密に精査すれば、イラン・コントラ事件公聴会のような裁判は、記憶と忘却が社会的に産出される明快な事例たり得る⁵。当然ながら、両院合同委員会の審理は、記憶の認知科学的な調査を展開したわけではない。むしろ、それは参加者がその場の

状況に即して、想起の文法を使ったり、それに異を唱えたり、時には展開したりする、公開討論会だった。いつ終わるともしれないこの闘争は、実際的にも理論的にも極めて有益だった。なぜなら、それによって私たちはイラン・コントラ事件公聴会において、歴史が産出される現場の知見を得ることができるし、人間科学における記憶についての広く行き渡った考え方について、決定的に重要な手がかりを得られるからだ。

コントラ・マントラと現場における想起の語用論

1987年、『エスクワイア』誌は、ポインデクスターⁱⁱⁱ、セコード^{iv}、ミース^vに「胡散臭い大賞」を与えた。これらイラン・コントラ事件の主要人物たちが、この雑誌が皮肉を込めて「コントラ・マントラ」と呼ぶ題目——「記憶にございません」か、それに類するフレーズ——を絶え間なく唱えたことによる。この雑誌の集計によれば、ポインデクスターらは両院合同委員会の前で行われる証言で数百回、このように発言した⁶。オリヴァー・ノースの証言の文字起こしを調べれば、彼もまた絶え間なく、次のようなフレーズを使っていたことがわかる。

「思い出せません」

「何も覚えていません」

「具体的な日にちを思い出せません」

「おそらくは——思い出せないので」

「現時点ではそれについて具体的に思い出せることはありません」

「そうは思いません。記憶を蘇らせていただいてもよいですが」

iii ジョン・マーラン・ポインデクスター、1936年ルイジアナ州生まれ。海軍職業軍人。1981年、レーガン政権下で国家安全保障会議軍事問題スタッフとしてホワイトハウスでの活動を始める。1983年安全保障担当大統領次席補佐官を経て1985年には海軍中將となる。同年12月大統領安全保障問題担当補佐官となるがイラン・コントラ事件への関与を疑われ1986年に辞任。2002年から2003年にかけてブッシュ政権下でDEPRA Information Awareness Officeのディレクターを務める。

iv リチャード・ヴァーノン・セコード、1932年オハイオ州生まれ。キューバ系ベネズエラ人反共テロリスト、ルイス・クレメンテ・ファウスティエノ・ボサダ・カリレスに対して毎月3千ドルと諸手当を支払った。

v エドウィン・ミース、1931年カリフォルニア州オークランド生まれ。カリフォルニア州オークランド生まれ。1967年カリフォルニア州知事法律担当秘書官ののちサンディエゴ大学教授、同大学刑法センター所長を経て1981年に大統領顧問、1984年司法長官。

そして、さらには

「記憶はシュレッターにかけられてしまいました」。

これらの発話が生じたやりとりは、聴衆にとって、証言の中で実際に想起と忘却を使う方法を伝授する場になる。新聞の社説や世論調査の結果、テレビのコメント、政治風刺漫画、公聴会の主要な参加者の発言から判断するに、思い出したとという発言の有無は、単に証人の記憶を報告したものとしては聞かれていなかった。聞き手にとって、それは回答を控えたり、さらなる質問を阻止しようとして回答を保留したりする、記憶ゲームの戦略的な指し手だった。何より、これらの発言は追求される可能性を（追求を避けようとしているという追求をも）避けようとするものだった。明らかにノースやポインデクスターらは、何かをごまかしていた。しかし、その時点では、聴衆にとってそれは明らかではなかった。加えて、認識的な論点——証言者はどの程度のことを本当に知っていて、果たしてそれを話すのか——は、彼らの振る舞い方によって見えにくくさせられた。上院議員のミッチェルとコーエンは、公聴会を振り返って、ノースについてこう書いている。証人の誠実さに関しては、「あの劇場は我々の疑いよりはるかに説得力があった」⁷。

『エスクワイア』誌のような風刺的は、「思い出せない」と言うのが、証人側に不都合な方向に進みそうな時に尋問側をうまく邪魔するありふれた回避策だと示している。知っていることを隠そうとするなら、証言者は答えをでっち上げるより、質問の指す内容を思い出せないとごまかすだろう。歴史的な公判の著名な人物も、このテクニックを利用した。例えば、1973年6月、ウォーターゲート事件について政府からの回答を用意しようとした時、リチャード・ニクソン元大統領とアレクサンダー・ヘイグ^{vi}は次のように会話したと報告されている。「彼とニクソンは前ホワイトハウス弁護士ジョン・ディーンによる深刻な容疑にどう答えるか話し合った。ニクソンとヘイグの議論を録音し、弾劾訴追の際に公開されたテープレコーダーによれば、ヘイグはニクソンに、容疑に関する質問には「覚えていない」と答えてかわすようにアドバイスした」⁸。心理学者ポール・エックマンは、不誠実に使えば、想起の回避は「改竄と隠匿を媒介する」という。なぜならそれは尋問の力に証人が抵抗しようとする努力を有利にするからだ。

「嘘つきは記憶をでっち上げるのを避ける。そのかわり、「記憶にない」という、真実ではないことを訴える。そしてもし後から本当のことが明らかにされれば、嘘つきはいつも、それについて嘘をついたのではなく、単に記憶に問題があっただけだと言える」⁹。証人の誠実さを測ろうとする質問者や聴衆にとって、「覚えていません」が回避策として用いられるかどうかは、時に見きわめがたい。もしその事件を思い出せないと言った場合、証人は偽証罪に問われる。しかし、その疑いが根拠のある疑い以上のものであると示すのは極めて困難だ¹⁰。

思い出せないという回避策はあまりに便利なので、「はい」「いいえ」で答える質問に対する紋切り型の回答の一種にもなりうる。凶悪犯刑務所の「狡猾な刑務所弁護士」ことロジャー・ブレスウェートに関する逸話を1つあげよう。ブレスウェート、「ガラガラ声で白髪交じり、49歳で大学教授のように見える、武装した強盗」は、非専門家のアドバイザーとして、懲戒委員会で他の受刑者を弁護した。「もし彼が法廷に出向き、議長が彼に依頼人の代わりに話すことを禁じたなら、ブレスウェートは意思を伝えるために他の方法をとった。彼がヒゲをなでれば「はい」、彼が自分の耳を引っ張れば「いいえ」、そして彼が机を指でトントンと叩けば「覚えていません」と答えるように、依頼人に伝えたのだ」¹¹。このような身振りの符号に還元されれば、「はい」「いいえ」「覚えていません」は原始的な言語ゲームのトークンになる。我々はブレスウェートと彼の依頼人が野蛮だと言うつもりはない。通常はもっとずっと複雑な実践を反復しているにすぎない。私たちは、このようなゲームの分析するに対する関心を、ウィトゲンシュタインの「もし私たちが言語の諸現象を、使用の原初的な場面において調べれば、この霧は吹き飛ばされ、語の目的と機能をはっきりと見通すことができる」¹²という忠告から得た。ブレスウェートの信号は、「覚えていません」というのは話者の認知状態についての報告でないと同様、「はい」「いいえ」に関する言い回しでもなく、賛成か反対かという精神状態の

vi アレクサンダー・メグス・ヘイグ・ジュニア。1924年ペンシルヴァニア州フィラデルフィア生まれ。レーガン政権でアメリカ合衆国国務長官を、ニクソン及びフォード政権で大統領首席補佐官を務めた。

報告ですらないことに私たちの注意を向けさせる。それは社会的状況に即した機能を果たす表現である。尋問されて窮地に陥った受刑者がブレスウェートをちらりと見る、ブレスウェートが指でテーブルを叩く、それを見て受刑者は「覚えていません」と答える——これをもって、受刑者は自分の精神から関連する内容を取り出すことができなかつた、とは言えまい。受刑者の回答が正しかろうが間違っていようが、「覚えていません」は「はい」「いいえ」形式の質問に対する3つの回答のセットからつくられたお決まりのトークンであることを、ブレスウェートの信号は明らかにしている。つまりそのような質問に答えるための、明瞭にして問題含みの、そして文脈によっては便利な、代替案なのだ¹³。

証言の中でしばしば使われる、この種の思い出せないという表現は、証人が当該の出来事について忘れてしまったという考えを何ら確証するものではないことは特筆に値する。そのような状況で証人が「覚えていません」と言うのは、「忘れました」「忘れていました」と言うのとは（しばしば「覚えていません」と同じように見えるが）全く異なる。ジェフ・クルターが指摘するように、知っていたと後になって主張できるのは、忘れたと答えないことによってである。何かを「忘れていた」——例えば「今日が結婚記念日だったのを忘れていた」——と言えば、その裏づけになるような対象（出来事や状況、人物や行為）が存在することを意味する¹⁴。何か[・]が[・]忘[・]れ[・]ら[・]れ[・]て[・]い[・]た[・]可[・]能[・]性[・]が[・]あ[・]る[・]。「覚えていません」「思い出せません」——例えば「お会いしたかどうか思い出せません」——と言うのは、そのような出来事が存在したかもしれないし、しないかもしれないことを意味する。証人がこう表現するとき、そのような出来事が起こったかどうか思い出せるか[・]ど[・]う[・]か[・]疑[・]わ[・]し[・]い[・]と[・]い[・]う[・]姿[・]勢[・]を[・]示[・]し[・]て[・]い[・]る[・]。その代わり、話者はその事柄をいくつもの意味に取れるように、後でもしかすると解決できるかもしれないような状態にできるのだ。

覚えていないのが実際に役立つことは、法学者には以前から認識されていた。例えばウィグモアは、想起の失敗は取調官に深刻な問題をもたらすと見ていた。「証人はやる気がなければ思い出せないと言って逃げるし、巧妙な嘘つきは側面から攻撃にさらされなければ動じない」¹⁵。取調官にとって問題なのは、「覚

えていないふりをする」のがよく知られた回避策である一方で、思い出せなければ全て偽装だとはいえない点にある。取調官にとって、証人が「思い出せない」と言う時に問題なのは、そう答えれば証人は「はい」「いいえ」形式の二項対立に無関係でいられるし、したがって真実を告白させようとする質問者の追求をかわしたり雲散霧消させたりできるからだ。例えば、証人が以前に証言した内容について思い出せないと言う時、法学上いかなる問題が生じうるかについて、グラハムは、その発言はそれ以前の証言と矛盾するわけではないと述べる。「本当に思い出せないことと以前の証言とは両立しないわけではない。それらは信念が食い違うことを証明しているわけではなく、いま現在は想起できないと示すに過ぎない。それどころか、証人が思い出せないのならば、食い違うための基本的な前提となる論拠が損なわれている。証人がその出来事を思い出せないのなら、先の証言の正しさも間違いも証言できない」¹⁶。グラハムいわく、証人が当該の出来事を思い出せないのなら「反対尋問は効果的に行い得ない。調査すべき出来事についての2つのバージョンがあるのではないため、裁判官は証人が一致しない事柄について言い逃れしようとしているのかどうか検討する機会が得られない」¹⁷。思い出せないふりをしていると示されるのでなければ、そのような証言はグラハムのいうところの「実のところ使えない」¹⁸ 証言者を生み出す。証言者が使えないというのは、質問に利用可能な回答をもたらすだけでなく、その発言が質問者側の筋書きを漸進的に進めるのを邪魔するからだ。そして、思い出せないふりをしていると思われる場合であっても、それが法廷で示されることは滅多にない。

次に引用する箇所は、「実のところ使えない」とはどういう意味か、はっきり示している。

ニールズ^{vii}：いまおっしゃっているのは、あなたは、(0.2) あなたは (0.2) コントラに数百万ドルを使う際、あなたより高位の政府関係者の同意を得たり求めたりしなかったと取っていいですね？

ノース：えー、いや (2.0) どうだったかわかりません。しなかったという意味ではなく。あー、どこかの時点でポインデクスター提督には、私のやっ

たことをご報告したかもしれません。しかし、あー (1.4) 現時点でははっきりとは思いません¹⁹。

「どうだったかわかりません。しなかったという意味ではなく」と言うことで、ノースは具体的に思い出せなくとも、その出来事について知らないことを肯定も否定もしない。この表現は、これほどの出来事を覚えていないかのような振る舞いとも関係している。したがって、ノースはそのことが起こったかどうかははっきりと言わず、しかし何らかの効果をもたらすような証言もしない。論理的には、二択の質問にこれほどあやふやにしか答えられない場合、真実を告白させようとする質問者側の試みから言い逃れたり、無効化したりする意図を疑われるだろう。この事例からわかるのは、ノースは具体的な事柄について想起するのを避け、出来事の時系列について合意に達しようとする質問者の仕事も問題にしているということだ。ノースは「どこかの時点で」とか「現時点で」と言い、いつポイントスターとやりとりしたか曖昧にする。この言い方によって、ノースは自分の上司にコントラへの武器販売による資金流用を正当化したことに疑う余地なく責任があるとも、ないとも言わない。

思い出すことと思い出せないことは、相互に排他的ではない。証言する時、証人はしばしば想起する内容を限定したり、確定しなかったり、範囲を定められなかったりする。次の例を考えて欲しい。ノースがイラン製の武器を売って100万ドルの利益を得、レイク・リソースなるダミー会社の銀行口座から、アメリカの支援する中央アメリカのコントラ勢力に送金した時のことだ。

ニールズ：……100万ドルがコントラの利益のためにレイク・リソースに預金されるだろうという了解あるいは話し合いはありましたか？

ノース：いいえ、その点についてはありませんでした。いや、いや、(0.4) 思い出せません (0.4)。それについての具体的な話し合いはもっと (0.5) ずっと後でした²⁰。

vii ジョン・W. ニールズ・ジュニア、1942年ニューヨーク生まれ。イラン・コントラ事件下院委員会のイラン・コントラ事件調査の首班を務めた

ノースは最初、ニールズの質問に対して否定的に答え、その後2度、自分の発言を打ち切り、再開した後、自分は後になるまで具体的な話をしたことを思い出せないと言っている。このたどたどしさは、ノースが質問をうまくさばいて身を守る防衛策だからかもしれない。しかし他のことも意味する。ノースはこの質問に関係のある情報を提供しつつも、それをある点で曖昧に組み立てているのだ。「その点」「具体的な話し合い」といった限定的な用語を用いてニールズの質問で使われた言葉（「了解あるいは話し合い」）を厳密にしているのだから、ノースの回答は全てが曖昧というわけではない。ノースは彼の思い出すこと（あるいは思い出せないこと）を示す証言を述べているものの、100万ドルが何のためのものだったかについて、その秘密作戦に関わった当事者がそれについて具体的な話し合いの前に理解していた可能性があるか否かについて言明していない。しかし、その可能性が後になって証言から明らかにされたとしても、その状態は記録に残らない。

思い出せないことによって、証言者は事件の中で自分の立場を損なうようなもっともらしいことをはっきりと述べるか、それとも自分自身のもっともらしさに疑義を招く危険性を負うかという「あちら立てればこちら立たず」を免れる可能性が生まれる。とはいえ、証人が「思い出せない」ということ自体の信憑性を裁定し得るのだから、質問者も手ぶらのまま放り出されているわけではない。証人の証言が得られないことと、「彼のような人物」なら確実に思い出せる（あるいは、有罪判決が出るような事件の場合なら、確実に否認したい）だろう出来事の記述とを並置すれば、質問者は聴衆に対して、証人が思い出せないと述べるのは、証言者の信頼性を損うだろうとほめさせる。証言者が思い出したり思い出せなかったりする、その当の事柄を知る手段が聴衆に何ひとつなかったとしても、そして聴衆が証言の信憑性を決定する決定基準を持っていない場合でも、その場のメンバーは通常、その証言の誠実さを判断できるし、そうするために証言者の頭の中を覗き込む必要は全くない。

証言者の頭の中を覗き込む術がないことは、間接的推論によって埋め合わせる、記憶の本質的な不確実性の源とみなされるべきではない。むしろ、ある点において個別の証人が何を（信頼でき、もっともらしく、意味のあるものを）思い

出せるかというのは、他の何にも還元できないほど公的な事柄なのだ。この記述は、証人が思い出せない事柄にも応用できる。エックマンが観る通り「思い出せないというのは、ごく限られた状況でのみ、信用できる」のだ²¹。エックマンは医師が「テストの結果が否定的な場合、それを思い出せないとは言えない」²²という例を挙げている。医師がテストの結果を忘れてしまった可能性はもちろん、十分にあり得る。しかし彼は「それを覚えていないとは言えない」、なぜなら、そのテストの結果を記録する適切な状況下では、それを覚えていることが医師の法的・職業的責任だからだ。その結果を忘れてしまったからといってその情報を報告する責任を免れるわけではない。関係する事例として、エックマンはさらに警察官を挙げる。部屋が盗聴されていたかどうか容疑者に問われた時、警察官は覚えていないとは言えない。特定の部屋が盗聴されていたかどうか思い出せないとは考えうるけれども、そのことをもって警察官がその事件に関連して知っている事柄についての責任を免れるわけではない（もしその部屋が他の警察官の管轄下にあったと言えれば、その警察官は責任を回避できるだろうが、その回答は、記憶がないと述べるのとは違う）。もし仮にそれが本当だったとしても、そのような記憶のなさや責任を回避しようとしていると思われるか、あるいは能力がないことを自ら認めていることになるだろう。警察官は覚えていないとは言えない。なぜなら、彼のような職業についている人々は、当然のこととして、そういった情報を集め（頭の中とは言わずともファイルの中に）保存していると期待されるからだ。これは心理学的な問題ではない。むしろ、特定の職業カテゴリに適用される法的規則や倫理的責任の問題である。クルターは次のように述べている。「ある事柄を忘れてしまうことは、(単なる)「認知的機能の低下」にではなく倫理的過失について責任を負う羽目になるかもしれない。この「心理的」なものや規範的なものとの結びつきは、既存の記憶モデルでは見落とされているものの、いったん日常生活の中から素材をとってくれば発見される」²³。

語源が同じであるため、個人の記憶能力に頼って情報を報告する際に、慣習的責任と法的責任とは簡単に混同される（この2つは当然ながら、しばしば両立する）。実際、イラン・コントラ事件の関係者は、ホワイトハウスが関係し、

イランへの武器輸出とコントラへの資金流用手続きを計画し許可を与えた特定の会議について思い出すよう求められた際に、この混乱を援用した。レーガン大統領とその周辺は、朝食答弁とでも言うべきもの、すなわち「6ヶ月前のある日の朝食に何を食べたか、どうやってわかるというんですか？」を答えた。このように答弁するためには、騙されやすい聴衆が、官僚にとって想起というのは、ファイルを調べて適切な記録を引き出してくることだということを忘れてくれなければならない。この事例では、このような答弁のもっともらしさは（説得力ある反証という方針に一致して）関連するファイルや記録を破棄し、特定の「忘却」に至ることで援助され助長された。さらに、イラン・コントラ事件の際立った特徴としてしばしば論じられるのは、議会の多くのメンバーや主流報道機関、マスメディアの受け手の多くが、特に大統領による一見ばかばかしい訴えに抗するのを差し控えた点だ。このやる気のなさは「裸の王様」の一種と言えるかもしれない。つまり、中央政府高官への恭順のゆえに、認識されているものを公的に指摘しない現象だ。この場合、このような恭順と共謀は、大統領が自身の行為に対して首尾一貫した説明ができない²⁴ことを許し承認することと結びついていったのではないだろうか。

レーガンの朝食答弁ほど見えてはいないが、記憶とは個人的なものだという観念は、証言のレトリックを産出し解釈する際に意味を影響を与えた。質問者と聴衆は、特定の証言者が覚えているだろう（覚えているべき）こと、そして特定の事件を体験した人がそれをどれくらい覚えていられるかについて、選択的に判断した。その判断の際に、当該の事件は多様な度合いで抽象化されたが、心がどう働くかという一般概念モデルとしての素人心理学の形はとらなかった。そのかわり、誰がどんな事柄を覚えているはず（べき）かという判断は、出来事や場面や主体や行為がどのような文脈とレトリックで記述されるかによっていた²⁵。つまり、そのような判断はその場で組み立てられ、選択的に異議を唱えられたマスターナラティブの中に組み込まれていたのだ。例えば、副提督ジョン・ポインデクスターは原子物理学の博士号を持っており、写真のように正確な記憶力を持っていたことはよく知られていた。公聴会の間、ポインデクスターの評判は彼に不利にはたらい。老化を噂され、記憶力の低さを

言い訳しやすかったレーガンとは対照的だった。ポインデクスターなら自分の体験を正確に思い出せるだろうと想定されたからこそ、メディアは、彼が何度も「思い出せない」と言うのは、自身と大統領を政治的な（そしておそらく法的な）ダメージから守るための煙幕としてはたらくご都合主義的な過失として扱った²⁶。

証言の中で、ポインデクスターは自分が、様々な場面を覚えていないと答えれば、それが疑わしく思われるだろうと気づいていたようだ。彼はしばしば、具体的に何が起こったかを思い出そうと努力してはいるものの、正確に覚えている事柄だけを報告せざるを得ないと強調した。彼を尋問する側（ここで挙げる事例ではアーサー・リーマン）は、この一見誠実な努力に見えるものにリップサービスをした。例えば、レーガンとの重要な一連の打ち合わせについて、ポインデクスターは次のように答えた。

ポインデクスター：私はその、えー、私の思うに、私は、非公開証言で申し上げた通り、大統領閣下のなされたことが何か、私自身はしなかったことは何かといった点について、非常にその、気をつけたいのであります。とても重要なことでありますから、私が何かとてもはっきりと覚えているのでなければ、大統領閣下が何をなされたとか、何をおっしゃったとか、えー、何を ご存知だと思ふかについて申し上げるのはその、差し控えたいと＝

リーマン：＝それはつまり、私の考えでは、あなたご自身がはっきりと[こうだったと]思い出すことが欠かせないと]

ポインデクスター：[そうです²⁷。

ここでポインデクスターは、あたかも乏しい光の中で、心の目によって図像を細部まで見、はっきり見えるものだけを述べようと骨を折っているかのようだ。それほど優しい見方をしないなら、ポインデクスターは言葉を曖昧にし、何かを偽装しようとしているようにも思えるかもしれない。しかし、パフォーマンスとして考えれば、ポインデクスターの記憶と記憶していないこととは、精密

に組み立てられている。彼は単にその事柄の細部を覚えていないと言っているわけではなく、高い精度で思い出すことができないと言っているのだ。まるで、彼が何を思い出し、何を思い出せないかについて、明確に線引きができるかのようだ。それどころか、この異様な正確さはポインデクスターが正確に「覚えている」ことだけを思い出す論拠になっているように思われる。ポインデクスターが提示し、リーマンが断言しているのは、ポインデクスターが証言において「極めて具体的に覚えていること」についてのみ思い出すべきだということだ。したがって、ポインデクスターはある会議について、誰が参加してどんな言葉が交わされたか正確に思えていないのなら、思い出せなくてもそれを正当化できることになる。並外れた記憶力の持ち主であっても、このような基準にもとづけば、思い出せる事柄は厳しく制約されるだろうことは想像に難くない。

この例でポインデクスターは「思い出せないことを隠れ蓑にしている」ように見える。しかし、彼がやっているのはそれ以上のことだ。リーマンの助けを得て、ポインデクスターは思い出せる事柄・思い出すべき事柄を決めるための極めて狭い基準を設定することで、その隠れ蓑を広げている。この基準は思い出すこと・思い出さないことの回避が推論によって組み立てられているという誤ったイメージを利用している。どれくらい誤っているかということ、ウルリック・ナイサーの「ジョン・ディーンの記憶」が参考になる。ディーンはウォーターゲート事件で証言したが、その証言をディーンの述べた事件の記述と比較したものだ²⁸。ナイサーは、オーバル・オフィスでの会議に関するディーンの証言を、ホワイトハウスのテープと比較した。会議は証言の9カ月前に行われている。編集されたトランスクリプトは、特別検察局で論争された後、最終的に公開された。公開されたホワイトハウス録音のトランスクリプトとウォーターゲート事件公聴会でのディーンの証言とを比較して、ナイサーは証言における回想と「実際の出来事」との一致に関する自然実験を考案した。ディーンは自分の頭はテープレコーダーではないと前置きしていたが、彼の証言は驚くほど正確だと一般的に評価されていた。ナイサーは調査に基づき、ディーンの記憶は正確ではなかったが、しかしディーン自身は本質的には誠実だったと結論した²⁹。例えば、ナイサーは次のように指摘する。1972年9月15日にニクソンとヘルド

マンが打ち合わせたことについて、ディーンの証言は実際にその会議で起こったことを述べてはいない。むしろ、ディーンは起こる「べき」だったことについての「幻想」を述べている。ナイサーによれば、ディーンの証言では、ニクソンが別の会議で話した言葉を発したとされ、ニクソンが会議の始めにディーンに挨拶し、ディーンの働きを称賛したということになっている。「要するに、9月15日の会話に関するディーンの説明は、言葉の上でも主旨の上でも間違っている。ディーンは主旨をよく記憶しているものの、プディングの中のレーズンのように、ところどころ言葉に詰まる人物だと受け取られていた。しかし彼はそのような人物ではなかった。彼は自分が感じたことや自分がこうあってほしいと思ったことを、事態一般と一緒にたにして思い出していた」(p.13)。

ナイサーによれば、その不正確で利己的な特徴にもかかわらず、ディーンの回想は、実際に話された言葉の「文字通り」の意味や、生じた事柄の大筋においてすら正しくなくとも、何があったかの「趣意」に関して誠実である。ディーンの証言に見られるような「細部に関して間違っているが本質的には正しい」回想に、ナイサーは「繰り返しエピソード記憶」という語を当てる。「しばしば彼らの記憶は、繰り返された経験に、単独の回想は単なる典型例に過ぎないようなものに基づいている。エピソードだと思われたものは、実際には繰り返し起こったことなのだ³⁰」。

ナイサーは想起について、「記憶痕跡」なるものが神経の中のドラム缶にどういうわけか保存されており、オリジナルな出来事の跡をたどってその精神的なありかから引き出すことができるという、古くからある心理学的・神経学的な観点とは著しく異なるものを提示している³¹。彼は証言の誠実さを、目撃されたオリジナルの出来事の細部に関する文字通りの対応関係とは区別する。ディーンの誠実さを評価するにあたって、ナイサーは単にホワイトハウスのテープと、その後のディーンの証言とを一言一句比較しただけではない。その評価は証人が過去を再構成する能力に関する、全体論的で寛大な評価でもある。結果的に、ナイサーは証言の文字通りの正確さと信頼性とは、原則的に、別のものにし得ることを見出した。むしろ、あまりに正確だったり逐語的だったりする証言は疑いを招く。裁判官はしばしば、証人の証言があまりに細かかったり、

事実の独立した記録とあまりに首尾一貫していたりすると、でっち上げやリハーサルの結果とみなして、それを使わないことがある。

ナイサーの知見に照らすと、「正確に」思っているものだけを証言しようとするポインデクスターの努力は興味深いものとなる。ある意味で、ポインデクスターはまさに、ナイサーが弁別しようとした正確さと誠実さとの混乱を利用している。正確な証言を、先行する出来事を「文字通り」再生産するものと同等にすることで、ポインデクスターは要点や趣旨として正しいと判断される事柄を回想から外すことを正当化する。結果として、彼が採用する記憶に関する抑制的基準は、すでに記録にない事柄の細部に関して開示しないために、レトリック上あきらかに有利に働く。

証言中における記憶の変化を理解するナイサーの研究の真価を知るためには、証人の想起を評価するのは、歴史を探求する基本要素として扱う必要がある。ナイサーは自身の研究において、そこまでは論じていない。彼はウォーターゲート事件に関するディーンの証言と、ディーンが供述したと主張する会議のテープ録音との違いの度合いを丁寧にし、そのような違いは事件をゆがめたり隠したりしようとする証人の意図を必ずしも示すものではないと明らかにした。しかし、ディーンの証言が全体として誠実である一方、なぜ個別の点で不正確であることを見逃しうるのか、ナイサーは示し得ていない³²。ホワイトハウスの文字起こしが手元にあったのは、この問題を解決しようと試みる際にかかなり有利だっただろう。しかし、ことはそう単純ではない。例えば、ナイサーがディーンの「繰り返しエピソード記憶」を誠実だと判定した件を検討してみよう。ナイサーは、この誠実さは個々の点では認められないとする。なぜなら、ディーンの証言は細かな点で不正確だったり混同していたり、「自己中心的」に組み立てられていたりするからだ。したがって、ナイサーはディーンの記憶について結論を出すとき、証言とそれが言及する過去との関係全体をいかに評価しているかに左右されている。それはディーンや他の証言者の意図を判断することを意味するが、そのためには、数多くの会話の結果だけでなく、日常的にホワイトハウスで使われている語彙や組織的な業務を理解する必要がある。ナイサーがディーンの証言が本質的に正確だと評価するために、証言をテープ録音とを

比較するのをやめなければならなかったことは、次のことを示している。すなわち、証言（誰かの過去の出来事について述べること）とはその人が実際に特定の時間と場所において体験したことを表象することだという発想は、誤りである。ナイサーのこの評価は、テープ録音との比較で不正確さを暴いたようには、経験的に示せるわけではない。加えて、デレク・エドワーズとジョナサン・ポターが指摘するように、ディーン「本質的な」誠実さ自体、ウォーターゲート事件の最中にも、またその後にも、疑問視されていた³³。ニクソン政権の弁護団がディーン証言の曖昧さや不正確さを信頼できない根拠と見なしたのに対して、上・下院委員会の多数派はそのような不正確さを、信頼できる証言にもあり得る破綻箇所として見逃す傾向があった。ナイサーはディーン「の信頼性を肯定的に評価するが、その一般的な基準は明確ではない。そのため、ナイサーの判断はウォーターゲート事件委員会メンバーやメディア報道による当時の評価と質的に異なるのか否か」という疑問を生む可能性がある。我々はナイサーがディーン証言を支持する意見を作れなかったと言っているのではない。そうではなく、ナイサーはディーン「の誠実さを評価するにあたって、社会学的な地平を考慮に入れなければならなかった」のである。こう評価するためには、ディーン証言について当時の、また歴史的な状況を幅広く検討する必要があり、さらにその当時にも、その後にも異論が出た多くの事柄について判断しなければならない³⁴。必要なのは、歴史の判断、そして歴史の中の判断に他ならない。

条件付きの想起

証言者の想起に関する判断は、しばしばより広く議論を呼ぶような、倫理的・政治的な問題点と不可分だ。証言がなされ評価される際に、思い出すことや忘れることの問題は目を引く。しかし、証人の言うことと、何が実際に起こったかを示す独立した表象とを比較しても、この疑問はめったに解決されない³⁵。そうではなく、証人の口頭の想起は典型的に、何が起こったかを再構成する（と主張する）ことによって、何が起こり得たか、起こるはずだったか、あるいは起こるべきだったか³⁶を述べている。これら条件法や助動詞による表現は、具体的に記憶に言及するわけではないが、より広い意味で、いかに過去が再構成

されるかに関連している。証言の中でこれらの表現が使われる様を細かに調べれば、過去なるものは、証人が用意しておいたある出来事の表象の形式などではないことが、次第に明らかにできるだろう。過去を記述するというのは、幅広い権利や人称に結びついた責任を主張し、断言し、否認することを含んでいる。

ノースはしばしば、過去の個別の出来事を述べる際に、その時点で彼ならやっていたらうことや知っていたらうことに言及した。そのように明言することで、言及された事柄は文脈の中で思い出されるだけでない。それらは特定の文脈の意味を発展させ、ノースがやっていたことや知っていたかもしれないこと、そして、彼が「その当時に」いかなる人物だったのかといった背景を示す。例えば、以下の例を考えてみよう。

ニールズ：あなたは、大統領がTOWの輸送を許可したことを知らされて
いましたか？

ノース：ある時点では、はい。

ニールズ：覚えている限りでは、いつ？

ノース：あー、86年には知らされていまして。クロノロジーを用意して
いた時なので、あー、たぶん85年には知らされていたはずです。そう
でなければ、もっと質問したはずです

ニールズ：(誰に)

ノース：[覚えていません³⁷]

ここでノースは、既知の出来事（「86年には知らされていまして」）からその
以前に（「85年」）に遡り、自分の行動は、ミサイル輸送を大統領が許可したと
ある時点で知らなければ行い得ないと言う。彼は、もし自分が前もって知って
いたならやたらうこと（「たぶん85年には知らされていたはずです。そう
でなければ、もっと質問したはずです」）に言及することで、回想を組み立て
ている。彼の説明によれば、もしイランへのTOWミサイル売却を大統領が許
可していなかったことを1985年に知っていたなら、ノースはその取引を執行
する際に許可の有無を確認したはずだということになる。実際には——この事

例では、実際にあっただろうことは——彼が何もしなかったと覚えていることから推察できる。実のところ、ノースはもし自分がその時点でその取引が許可されていると知っていれば、もっと質問していただろうと主張しているのだ。この発言は想起の形式をとっているが、道徳的な主張としても同じくらい際立っている。ノースは、自分はおかれた状況で適切な行動をとると自己弁護している。自分は、まず適切な許可を得ることなく行動するような人間ではないと主張しているのだ。彼の想起は個人史の中に位置付けられ、その個人史の道徳的立場を擁護するように提示されている。

過去についての訴えを評価する時、証人と聴衆は専門的な歴史学者に似た方法論上の特徴を引き出す。例えば、彼らは捜査の対象とされている時点において関係者に知ることができていたり重要だったりしたことと、捜査されている現在の時点において関係者が知ることができ重要であることを区別する場合がある³⁸。次の質問・回答のやりとりは、この区別をわかりやすく示している。

ニールズ：比較的同時期、合衆国からイスラエルにホーク式ミサイルが輸送されたことについて、何か気づいておられましたか？

ノース：そうは思いません。つまり、あー、また記憶を蘇らせていただいているかもしれませんが、しかし、その時点でわたしが知っていたかという、違います。知りませんでした³⁹。

彼が当該の取引に「気づいて」いたのを直裁に否定したのは、もちろん、何が起こったか証言することができず、また不関与の程度を示すものだろう。「記憶を蘇らせていただいている」と言って自身の回答を限定することによって、ノースは回答の範囲を時間的にも論理的にも制限する。彼は自身の回答は現在における、現在のための回答であると示し、過去に実際起こったこととの明確な関係を持たないものにしていく。これは、後になって他の記録と一致しないと判明した場合でも矛盾として攻撃されずに撤回できるような、引き延ばし作戦の1つだ。別の言い方をすれば、ノースの回答は目下の質問を扱いつつ、ニールズが後になって論難する可能性のあるものを遠ざけている。これを戦略的な

指し手と解釈することは容易いが、しかしそれが意図的な計略だと受け取られるか否かは、ノースが当該の取引に「気づいて」いたことを思い出すかどうかにかかっている。ノースが答えをはぐらかす際に「記憶を蘇らせる」必要に触れているとおり、記憶の問題はここで鍵を握っている。問題となっているのは、いかにして記憶が実際に作動しているかを述べることではない。むしろ問題となっているのは、自分が覚えていたり、忘れていたり、部分的にしか思い出せなかったり、後の出来事に関連して思い出したりするとノースが言うことについて、聞き手がそれを信憑性があり、納得ができ、誠実な訴えとみなすことについていかに頼っているかという点だ。記憶は重要だが、それは記憶がノースが聞き手の作る規範的前提を通じて意味される限りにおいてのみ重要なものであって、逆もまた然りである。この状況は「はい・いいえ」形式の質問でしか答えられない場合、証言者にとって論理的な制約を緩める。しかし質問者側は、誰かが(具体的なカテゴリーに属する誰かが、あるいは証言者がおかれていたのと同じ状況では)自分自身の過去を思い出せるはずだったり思い出せなかったりするだろう場合の規範的なクレームを申し立てることで、証言者を圧迫することができる。

叙法形式(「したかもしれない」「だったかもしれない」「おそらく……だっただろう」「～だったはずだ」「～だったに違いない」など)は、証言者が想起するよう依頼されているという事実を弱めたり、軽くしたりするわけではない。それらは質問者や証言者に、具体的な過去を明らかにするための根拠を示すように働く。このような表現は、三段論法につきものの「はい」「いいえ」形式の二項論理を尊重しない。というのも、これらの叙法形式はあらゆる(可能な、あり得る、反駁可能な、疑う余地のない)推論を受け入れるからだ。証人の信頼性とその回想内容の信憑性は、公的な基準や議論、そして道徳的判断に結びついている⁴⁰。とはいえこれらは単独で、レトリックとして競合しながら用いられるため、安定した不動の規範的水準を作り上げるわけではない。

証言者が過去について述べることや過去についての知識の重要性を軽視するわけではないが、これらの事例からは、証人が自らの過去にやったことや知っていたことの何が言えるかについて、証言者だけがコントロールしているわけ

ではないことは明らかだ。ノースや他のイラン・コントラ事件の証人たちが機知に富んでいたとはいえ、次の引用が示すとおり、彼らは自分たちが過去にやった事柄の細部にわたって、完全にコントロールできたわけではなかった⁴¹。注意して見てほしい。ニールズは、ノースができるなら確実に否定しなかったであろう場面を記述することで、ノースの証言（しないこと）を組み立ててみせた。

ニールズ：あなたが司法長官におっしゃっているのは、資金流用のメモがあったり、資金流用の必要性があったりしたということですか？

ノース：ですから、私は具体的な会話は全く覚えていませんが、そうではなかったとは言いません。

ニールズ：否定なさらないと？

ノース：しません。

ニールズ：あなたは、アメリカ司法長官が、資金流用に関する文書を隠匿しておく方法を見つけたと、否定なさらない？

ノース：私がそう述べたと否定はしません。そのように記憶しているとも言っていませんが⁴²。

このやり取りが明らかにしているように、ノースが記憶にないとは言わないのは、彼が「資金流用という事実」を伏せるようミースに依頼したということを確認するわけでも、否定するわけでもない。ニールズはこれを反駁されないままにはしておかない。ノースの否認を受け、ニールズは(1) ノースの回答が否定でないこと、そして(2) ノースの回答は司法長官がスキャンダラスな（と後になって判明したような）行政手続きを行なったことを否定しないことを強調するようなやり方で、ノースに説明を求めた。ニールズは、ミースの前職名を「アメリカ司法長官」とよんで2点目を劇的に表現し、ノースの発言を「方法を見つけた」と口語的に言い換える。この形式は記述された場面の違法性を強調し、ノースがそれが起こったと否定しないのに対して懐疑的な姿勢をとる。司法長官と言うことで、記述された取引は、政府高官が公務上行った事柄にされる。これは1986年11月、ミースが意図してイラン・コントラ事件の捜査を

始めた際に、自分は「司法長官」ではなく「大統領の友人」として職務に当たる⁴³と述べたことと対照的だ。ノースが、彼の立場に置かれれば誰でも否定したいだろうことを否定しない点を繰り返すことで、ニールズは、ノースの回答が得られないことを「不抗告の抗弁」に形作る⁴⁴。ノースは珍しく、ニールズによる事件の描写に反論する機会を見送り、別の視点から説明もせず、(しばしばそうしたように)全くそのつもりはなかったことをしてしまったのだとほのめかすこともない。ノースはその出来事を覚えていないと言い張り、その出来事はニールズの描写する以上のものではないことにしようとする。しかし、ミースが証拠を隠滅した可能性を示唆しかねないのを否定しないことで、ノースは自分の立場を悪くする自白をしたに近い。

上述のやり取りから、証人が「実際のところ使えない」からといって、存在しないのとは違うことだとわかるだろう。証人は物理的にその場にいるし、検察は証言を促したり記憶を呼び起こしたりする質問をする権利がある。それによって証人は再び、聴衆がその信頼性を評価するのに「使える」ようになる。検察は単なる「はい、いいえ」の質問をするだけではないし、証人が何を言おうとそれでよしとするわけでもない。むしろ、質問と回答を重ねて検察は捜査し追求し、証人は最初の言明を繰り返したり弱めたり限定したりする。ニールズがこのやり取りで使ったようなレトリック的な道具は、証人の「記憶にない」という告白の信頼性と信憑性のなさを劇的に示す。この対話上の策略は、証人の頭の中に実際のところ何があるかに依拠しているのではない。検察と証人は記憶の劇場で論を競い合う。両者は記憶をめぐる公的な基準に訴える。その基準には、聴衆が証人の過去を作り出せるような何かを説得力を持って具体化するための、マスターナラティブと我々が呼んだものも含まれる。

信憑性と歴史の産出との関係は、少なくとも2つの理由により、複雑だ。「ありそうな」出来事が歴史の記録に残される可能性が高いのは本当だが、例えばある出来事が(特定の科学的発見のように)あまりにあり得そうにないが故に、それが起こるなどと誰にも想像できず、そのためかえって信憑性を得ることもある。ゲイリー・ウィリスが、1986年のレイキャヴィックでのサミットにおけるレーガンとソヴィエト指導者ミハイル・ゴルバチョフとの会議について述べた際に、

この鮮烈な例を提供した。ウィリスによれば、会議のある時点で、レーガンはもしソビエトが同じようにするならば、アメリカは自分の核兵器を全て廃棄しようと言言し、随行者一同を驚かせた。その会議の直後、スポークスパーソンたちはレーガンがそんな発言をしたことを否定しようとスピコンコントロールに躍起になった。この発言でレーガンが約束したことは「ノースの発言とは」かなり違うが、しかしウィリスが書き留めたように、レーガンがその時点でこのような申し出をしたというのがあまりに考え難いという事実こそ、この話の信憑性を高めている。「レーガン大統領がアメリカの全核兵器とロシアのそれとを取引したということが、その証拠だ。我々はこれを「より難しい読みがより有力」の原則で受け入れなければならない。つまり、あまりにおかしなことだから、誰もそれが実際に、ありそうもないことだが、起こらない限り、そんなことがあるなどとは想像もつかないからだ」。しかし、ウィリスはこうも論じる。この考え難い事件は、誰もそんなことを思いつかなかったからこそ信憑性がある一方で、そのことはこの事件をサミットの公的な歴史から消しやすくもした。「スピコンコントロール」の努力は短期的には成功した。なぜなら、この提案は考え難いために否定しやすかったからだ。大統領が、防衛政策や同盟国、議会や統合参謀本部に凶ることなしに、我々の防衛政策の基礎であるところの核兵器を全て容易く手放そうとするなど、どうしてあり得るだろうか？」⁴⁵

経験の政治学

私たちが論じているのは、法的・文学的・社会・科学的な回想と想起に関する議論を戸惑わせるようなことだ。なぜなら、証人が過去について言うことは、以前実際にあった、あるいは想像した経験を報告したもの（証人の回想に先立ち、回想できる事柄を決定する記憶の痕跡がある）として扱う自然な傾向を問題化しているからだ。私たちがここまで論じてきたことからすれば、証言者が想起を避けるとき、それが過去についての正直で誠実な報告であるか否かを判断するために、記憶像を参照することが可能だと考えるのは馬鹿げていることになるだろう。そのようなことが不可能だというわけではない。しかし、証言者の記憶を評価する、素人あるいは専門家の判断は、回想され得ることと回

想され得ない事柄についての慣習的なものの見方を参照することによってなされている。これらの判断は、証人が過去について知っていたり言えたりすることについて、しばしば政治的に異論の多い幻想を呼び込む。

証人喚問では、質問者が証人を説得したり丸め込んだりして過去についての自白を引き出そうとする対話によって成り立つ。他方で、その対話が聴衆の前で展開することを忘れてはならない。もし質問者が被告人から自白を引き出し損なった場合でも、質問者は質問の流れから証人の過去をほのめかし、証人がいかに信用ならないか、劇的に示すことができる。質問者は聴衆との共謀を想定したり示したりしつつ、証人が言ったり、やったり、知っていたりするだろうこと、その可能性があること、そうであるに違いないことを証人が認めたり異議を唱えたりするよう、証人にプレッシャーをかける。大法廷の公聴会では、異議申立て人が裁判官や陪審員に訴え、裁判官や陪審員は証言の不一致を解決する役割を担い、単一の判決に達する。対照的に、イラン・コントラ公聴会のような小法廷での公聴会では、質問者と証人とのドラマティックな対面が政治化された競争を豊富に生み出す。その競争では、競い合う双方が大勢の、異なる派閥に属する聴衆から賛同や支持を得ようと試みる。第2章で論じたように、ノースは証言の最初からこの可能性を利用した。再度考えてみよう。

ニールズ：しかしこれらの作戦は、アメリカの人々に秘密裏に行われるよう考案されました。

ノース：ニールズ弁護士、どうすればこの件をソ連に知られることなくアメリカの人々に伝えられたのか、私にはわかりません (1.5)。ふざけているわけではなく、どうやってそんなことができるのかわからないのです。

……

ニールズ：しかし、しかしアメリカの人々には秘密裏に行われるよう考案されたわけでしょう (3.0)

ノース：あのですね、大事なのは、ニールズ弁護士、えー (1.0) 我々は今この場で、何が隠密作戦であるかについては共通の見解に達しつつあるわけです。もし我々がこの公聴会をモスクワに報道されるのを煙幕を張っ

て阻止しようとするれば、あー、その、アメリカの人々に知られることなしにですね、我々は、そうしているだらうと思うわけです。しかし [我々は] そうはしていない⁴⁶。

この引用箇所、ノースは歴史的な「事実」になりうる事柄を、事実と反する文脈に置き、その意味や歴史的な状況、そして明白な政治的意味を相対化している。ニールズが具体的な隠密作戦について「アメリカの人々」を欺くよう考案されたと示唆したのに対して、ノースはその具体的な指令を公にすれば成功しなかつたらうと断言し、反論している。「隠密作戦」が人を欺くよう考案されている点について否定することなく、ノースはその欺く対象を「アメリカの人々」から「ソ連」へと変える。ノースは政府が「アメリカの人々」に対し情報を伏せて居たことは否定しない。しかし反実条件節を使い、その秘密性の文脈を設定し直している。ノースはニールズに（そして聴衆に）、隠密作戦の内実を「理解」する方法を教示し、想像上の「煙幕」のイメージを繰り返して、できたならやつたらうことを述べる。興味深いことに、彼は「隠密作戦」について論ずるに当たって、モスクワから知られるのを「阻止する」ことのできない公的な議論の例として現在の公聴会を例にあげる。もしかすると、隠密作戦に適切とされる慎重さと否認権とは、現在の公聴会にもまた適用されるべきだと示唆しているのかもしれない。当該の隠密作戦の発案者が明らかに不可能であることをやろうとしたか否かを論じることで、ノースは自分たちのとった行動の政治的・道徳的な意味合いの文脈を変える。彼は「ソ連」と「アメリカの人々」を対置する。このように述べることは、ノースのような人々にとって、民主主義的な理想に対する強力な外部の脅威と戦うために、その理想と反することを正当化する政治的な訴えを含んでいるだらう。

結論

想起を回避する（「記憶がありません」「思い出せません」「覚えていません」等々）論理的な位置付けは明らかだらう。このような発話は、具体的には「はい」か「いいえ」以外の回答を排除しようとする質問者の意図を妨害する。し

かし、我々が論じてきたように、証人が真実発見エンジンの働きを妨害したりそれから逃れようとしたりするような意図を持っていることは、これらの発言から明らかにするのは（そのような意図があるともっともらしく見なすことすら）しばしば難しい。想起の回避は無罪性や公正さの主張の一種になりうるし、しばしば実際にそうなっている。

想起できないでいる事柄を思い出すよう促される可能性があるとはいえ、証言者は当面の間、過去について意味することに明白な責任を負わずにいられる。「記憶にありません」と言うのが回避目的に役立つ理由は、取り調べ装置を遅延させる、この働きにある。というのも、証言者はその時点で認めていない事柄を後になって追認するときでも、発言が矛盾する犠牲を負わなくて済むからだ。しかし、これまで述べてきたように、この可能性は常に証言者を自由にさせるわけではない。なぜなら証言者は、その状況に置かれれば（関連するカテゴリに属する人なら）「誰でも」思い出すはず/べき事柄を思い出す責任を負うからだ。質問者は証言者が自身の過去について、証言者が知っていたことも含めて、言える、あるいは言えない事柄を述べることはできる。権力が問題となるのは明らかだが、より広い範囲の考慮すべき事柄が作用し始める。それによって質問者は、証言者の経験を明言・否認する意思に反しにくくなる⁴⁷。第3章で述べたように、近代的な法廷は公開の場で真実を告白させる方を好むため、自白を強制するように見えるのを避けるように設計されている。今や我々には、法廷の公開性は証人の秘密を公に明らかにするだけでなく、証人の同意や否定、想起の道徳的立場を評価する、競合可能な公的基準を用いる時にも問題となることも明らかだ。

記憶の劇場として考えた時、法廷は証人のプライベートな経験が、何が認定され何が否定され得るかについての規範的な水準に沿って、明確にされ綿密に検討される推論的空間だといえる。質問者は特段、明瞭な三段論法を構成する関心を持っているわけではない。しかし、第4章で論じたように、先に述べられた証言の線に沿ってさらなる情報の開示と自白を追求する。質問者は証言者と聴衆を満足させるために単純な一人芝居を繰り返してはしない。そうではなく、質問者は証言者の発言を促し、その発言を質問の踏み石にして議論を組み立て、

証言者の信頼性に異議を唱える。記憶がないと明言したからといって質問の流れが止まるわけではない。質問者はいつでも証言者が鍵となる出来事を思い出せないことのもっともらしさに疑義を唱えられるからだ。上述のように、質問者は文書記録を提供したり先に出された証言を引いたりして、証言者の記憶を呼び起こそうと試みもする。対話的な証言の産出に対するこのようなテキスト上の介入は、それらの記録を書いたり、破棄したり、公開したりといった情報操作とともに、イラン・コントラ事件公聴会の間じゅう生じた巧みな歴史の消去について、さらなる検討の対象を提供している。

- 1 Ludwig Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, Trans. G. E. M. Anscombe (Oxford: Basil Blackwell, 1958), sec. 305 (=2013、丘沢静也訳、『哲学探求』岩波書店、p.196.)
- 2 Francis Yates, *The Art of Memory* (Chicago: University of Chicago Press, 1966)
- 3 John Sweeny, "The British Connection", *Observer*, (London) Nov.7., 1993, p.20.
- 4 組織的な情報操作の精緻な分析については以下を参照せよ。Erving Goffman, *The Presentation of Self in Everyday Life* (Garden City, N.Y.: Doubleday Anchor, 1959).
- 5 ハロルド・ガーフィンケルは *perspicuous instances* という表現を使い、学術的関心のあるトピック（この場合、記憶）が内在的な、実際の扱いになる状況を描写している。ガーフィンケルは古典的な社会-科学的な話題から根本的な知見を得る方法として、関連する専門技術を現場で調査することを勧めている。Gerfinkel, "Respecification: evidence for locally produced, naturally attempted phenomenon of order, logic, reason, meaning, method, etc. in and as of the essential haecceity of immortal ordinary society (I)- an announcement of studies", *Ethnomethodology and the Human Science*, Ed. Graham Button (Cambridge University Press) pp.10-19
- 6 1987年、エスクワイア誌の胡散臭い大賞には100を超える「コントラ・マントラ」の例が挙げられた。上院議員ウイリアム・コーエンとジョージ・ミッチェルの数えたところによると、ポインデクスターは質問された事柄について、184回にわたり、思い出せないと答えた。*(Man of Zeal: a Candid Inside Story of the Iran Contra Hearings* (New York: Penguin, 1988, p.195) 「レーガン大統領、魅力は保っても記憶は保てない」と見出しをうった新聞記事は、レーガン元大統領がポインデクスター裁判に関するビデオ記録について124回にわたり覚えていないと訴えたことを明らかにした(ロサンゼルス・タイムズ、1990年2月23日、p.1。Michael Schudson, *Watergate in American Memory* (New York :Basic Books, 1992, p.175)。このように数えるのは、鍵を握る証人が揃って記憶に失敗したと示すために使われたが、実際のところ、ジャーナリストにとってこのような数を記録するのは難しかったに違いない。証人にとって「覚えていません」というのは、出来事の詳細を想起できなかったり、思い出せなかったり、覚えていなかったりすると宣言するか、起こったことについては異論のない事件のある定式化を認めないための、多様な言い回しの一つに過ぎないからだ。
- 7 Mitchel and Cohen, *Men of Zeal*, p163.
- 8 David E. Rosenbaum, *New York Times*, Dec. 17, 1980, quoted in Paul Ekman, *Telling Lies: Clues to Deceit in the Marketplace, Politics, and Marriage* (New York: Norton, 1985), p.30. ミッチェルとコーエンは、Men of ZealでニクソンがH. R. ヘルドマンとジョン・ディーンに「何があっても絶対に「覚えていません」「記憶にありません」「正直なところ覚えているとは言えません」と言え」と伝えたことを引用している。Transcript of March 21, 1973, "Transcripts of eight recorded Presidential Conversations", Hearings before the House Committee on the Judiciary on H.Res. 803, A Resolution Authorizing and Directing the Committee on Judiciary to Investigate Whether Sufficient Grounds Exist for the House of Representative to Exercise Its Constitutional Power to Impeach Richard M.Nixon, May-June 1974, Serial no.34, p.120. より引用。
- 9 Ekman, *Telling Lies*, p.30
- 10 例外は、レーガン大統領前補佐官マイケル・デーヴァーで、ホワイトハウスを去った後に行っ

たロビーイングの重要な面を覚えていないという彼の誓いは、偽証であると判決が出された。これほどの記憶違いを弁護しようとして、デーヴァーは自身のアルコール問題によって心も倫理的判断力も曇ってしまったと訴えたが、法廷では棄却された (*Mitchel and Cohen, Men of Zeal*, p.204)

- 11 Ethan Hoffman and John McCoy, *Concrete Mama: Prison Profiles from Walla Walla* (Columbia: University of Missouri Press, 1981), p.139.
- 12 Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, sec. 5.
- 13 ジョン・サル次のように書く。「もし私があなたにはい/いいえの質問をすれば、あなたは答える。もしその答えが質問への回答であるなら、それは元々の質問の命題の内容に対する肯定か否定として数えられなければならない」(Searl, *Speech Acts* (Cambridge: Cambridge university Press, 1981), p.139)。この時、彼もまた他の人々と同様、この慣習的な可能性を見落としている。
- 14 Jeff Coulter, "Two Concepts of the mental", *Social Construction of the Person*, ed. K.J. Gergen and K.E. Davis (New York, Springer, 1985), pp.132ff. 「忘れられた」ことが意味する具体例や、それが会話の中で関連付けられる方法の研究については、Charles Goodwin, "Forgefulness as an interactive resource", *Social Psychology Quarterly* 50 (1987): 115-31.
- 15 John Henry Wigmore, *Evidence* (Chadbourn rev.ed., 1970), p.115-31
- 16 Michael H. Graham, "The confrontation clause, the hearsay rule, and the forgetful witness," *Texas Law Review*, no.56 (1978):156 (強調は原文)
- 17 上掲書, pp.161-162.
- 18 上掲書, p170
- 19 Afternoon session, July 7, 1987, ML/DB transcript, pp.26-27
- 20 Afternoon session, July 7, 1987, ML/DB transcript, pp.26-27
- 21 Ekman, *Telling Lies*, p.3
- 22 上掲書。これらの事例に対するエックマンの議論は当該の事件の特徴、あるいは「思い出しやすさ」に焦点を当てており、情報が提供される際の職業カテゴリやそれに伴う責任の重要性を直接には認めていない。
- 23 Jeff Coulter, *Rethinking Cognitive Theory* (New York: St. Martin's Press, 1983), p.135.
- 24 Garry Willis, *Regan's America* (New York: Penguin, 1988), p.465.
- 25 Kenneth Burke, *A Grammar of Motives* (Englewood Cliffs, N.J.: Prentice Hall, 1945).
- 26 ミッチェルとコーエン(*Men of Zeal*, p.197)は、ポインデクスターが頻繁にパイプをくわえるのを「意図せず生み出された、彼の証言のメタファー」と見ている。
- 27 Afternoon session, July 17, 1987, ML/DB transcript.
- 28 Ulric Neisser, "John Dean's memory: a case study", *Cognition* 9 (1981): 1-22.
- 29 上掲論文, p.10.
- 30 上掲論文, p.21.
- 31 目撃情報の想起に関する影響力ある実験では、記憶についてのお定まりの見方も、それほど根本的にはないが、問われている。以下の論文を参照のこと。Elizabeth Loftus and Geoffrey Loftus, "On the permanence of stored information in the brain", *American Psychologist* 35 (1980): 409-20; Elizabeth Loftus, "Leading questions and the eyewitness report," *Cognitive Psychology* 7 (1975): 560-72.

- 32 この批判は Derek Edwards and Jonathan Potter, “Ulric Neisser’s memory”, chap.2 of *Discursive Psychology* (London: Sage, 1992), pp.41-42. による。David Middleton and Derek Edwards, “Conversational Remembering: A social psychological approach”, *Collective Remembering*, Ed. D Middleton and D. Edwards (London: Sage,1990), pp.35-38. も参照のこと。
- 33 Edwards and Potter, “Ulric Neisser’s memory” はモロッチとボーデンによるゴーン上院議員のディーンに対する質問を分析を引用している。エドワード・ゴーン上院議員は上院委員会でニクソン側に立ち、ディーンが信頼できないことを示すため、ディーンの証言の曖昧な点や不正確な点を繰り返し捉えて指摘した。Harvey Molotch and Deirdre Boden, “Taking social structure: Disclosure, domination and Watergate hearings”, *American Sociological Review* 50 (1985):273-88.
- 34 Schudson, *Watergate in American Memory*.
- 35 記憶の表象主義理論については、A. J. Cascardi, “Remembering”, *Review of Metaphysics* 38 (1984):275-302.
- 36 ウィトゲンシュタインは『哲学探究』で話者が過去にしようとしたことやできたことを述べるのは、その出来事を思い出す際の能力や道徳の問題だという例を提供している。反実仮想の関連する面については Malcolm Budd, “Wittgenstein on meaning, interpretation and rules”, *Synthesis* 58 (1984):312. を参照のこと。反実仮想的な可能性の問題が生じたレイプ事件の調査については、Paul Drew, “Counterfactual evidence in courtroom cross-examination: The case of a trial for rape”, in *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*, Cambridge: Cambridge University Press,1992), p.478
- 37 Afternoon session, July 7, 1994, ML/DB Transcript.
- 38 科学史では、トマス・クーンのプロギストン説の議論に「ホイッグ史観」を避けようとする傾向が顕著である。クーンはプリーストリーやラヴォアジエや、彼らと同時代の人々が赤く熱された水銀灰から何を「観察」していたのか決定する際に、現代の化学的テキストを使わないよう、読者に忠告している
- 39 Afternoon session, July 7, 1987, ML/DB transcript, p.37.
- 40 Augustine Brannigan and Michael Lynch, “On bearing false witness: perjury and credibility s interactional accomplishments”, *Journal of Contemporary Ethnography* 16 (1987): 115-46.
- 41 Coulter, *Rethinking Cognitive Theory*, p.135, は正当な忘却 entitled forgettings という発想を紹介している
- 42 Joint Hearings, North, pt.1, p.24.
- 43 第4章を見よ。また Timothy Halkowski, “Role’ as an interactional device”, *Social Problems* 37 (1990): 564-77.
- 44 グラハムは「記憶にないと偽るのは、それ以前の証言を否定するというより、暗黙のうちに自白しているのに近い」と評している (“the confrontation clause”, p.162.)。これが事実かどうかはさておき、質問者が証人の特定の忘却を偽りだと知るような機会はそう滅多にあるものではない。
- 45 Willis, *Regan’s America*, p.464
- 46 Morning session, July 7, 1987, ML/DB transcript.
- 47 Alec McHoul, “Why there are no guarantees for interrogators”, *Journal of Pragmatics* 11 (1987):455-71.